

日本語・スペイン語の複数人会話における話者交替と発話の重なり

——聞き手の反応を中心に——

市川禎理（関西外国語大学非常勤講師）

はじめに

外国語学習者にとって、学習言語での会話のやり取りは、一対一の場合に比べ、複数人会話において発言することの方が難易度は高い。一対一の会話では、会話が進行する上で必然的に発話の機会が与えられ、発話中の割り込みの可能性が極端に低い一方で、複数人会話においては、たとえ参加者の一人が発話しなくても他の参加者によって会話は問題なく進行可能であり、必ずしも発話の機会が与えられるわけではない。したがって、発言するためにはより自発的な発話権の取得が必要となる。盛り上がっている会話ほど会話の参加者は自発的に発話するため、学習者にとっては自ら発話権を取得することが母語話者に比べてより一層難しくなる。

Solano (2010)は、スペイン語を母国語としない者（以下、非母語話者）がスペイン語母語話者（以下、母語話者）との会話中に行う発話権取得の行動について、非母語話者1名と母語話者3名による会話を分析している。Solanoは、分析の対象となった学習者は母語話者3名と比較して、自己選択による発話権の取得よりも他者選択による発話権取得の割合が多く、発話時間が長い（発話に時間がかかる）こと等を特徴としてあげ、非母語話者は会話の主導権を握ることが難しく、割り込みによる発話ではなく話者移行適切場所（TRP）での交替を好む等といったGarcía(2005)の結果を裏付けるものであったとまとめている。

また、学習言語でのグループ会話での発言を難しくする要因として、Tannen (1984)の「会話スタイル」の違いが、学習言語を運用する上でも影響している可能性が十分に考えられる。

本発表では、まず日本語・スペイン語の両言語グループの日常会話をそれぞれ録音し、会話分析の手法を用いて主に話者交替の観点から記述する。特に各参加者の会話への参加の仕方や聞き手の反応に焦点をあてて両言語の会話データを観察することにする。

1. 観察対象

(1) 会話資料

今回は、日本人3名およびスペイン人1名¹⁾による日本語会話、コロンビア人学生4名によるスペイン語会話を観察対象とした。それぞれ約30分の日常会話を録音²⁾し、そのうち20分を文字化³⁾して比較した。どちらの会話においても会話参加者は初対面ではなく、ある程度気心の知れた間柄である。自然な会話を収集するため、会話のテーマや条件は特に設定せず、自由に雑談してもらった。録音データの文字化にはELANを使用した⁴⁾。

(2) 主な分析箇所

Sacks, Schegloff and Jefferson (1974)が提唱したターンテイキング（話者交替）システム⁵⁾に基づ

き、話者交替を話者移行適切場所 (transition relevance place) (以下、TRP) や発話の重複の観点から考察する。TRP は、順番を構成する最小単位である順番構成単位 (turn constructional unit) (以下、TCU) が完結可能な時点を指し、話し手以外の者が順番を取って話し始めてもよい場所とされている⁹⁾。言い換えれば、話者交替や聞き手による「あいづち」など、会話参加者の発話が発生しやすい場所である。

一方で、TRP 以外で発話が発生しないわけではない。他者の発話中に発話権を主張する「割り込み」発話や、発話権を主張しない「あいづち」発話等による発話は、TRP 以外でも確認される。

本発表では、TRP や「割り込み」発話等によって発話の重複が生じた部分に焦点を当て、発話権の取得・維持、あいづち使用の多寡などを中心に観察する。

2. 観察

(1) 会話時間に対する発話時間の割合

図1は、ELAN に書き起こした注釈時間の統計データから会話時間 (それぞれ観察の対象とした会話 20 分間) に対する各会話参加者の発話時間割合および会話時間に対する沈黙時間の割合を算出し作成したものである。スペイン語会話は沈黙時間の合計が2分弱、日本語会話については1分弱であった。なお、この発話時間には「笑い」が含まれている。

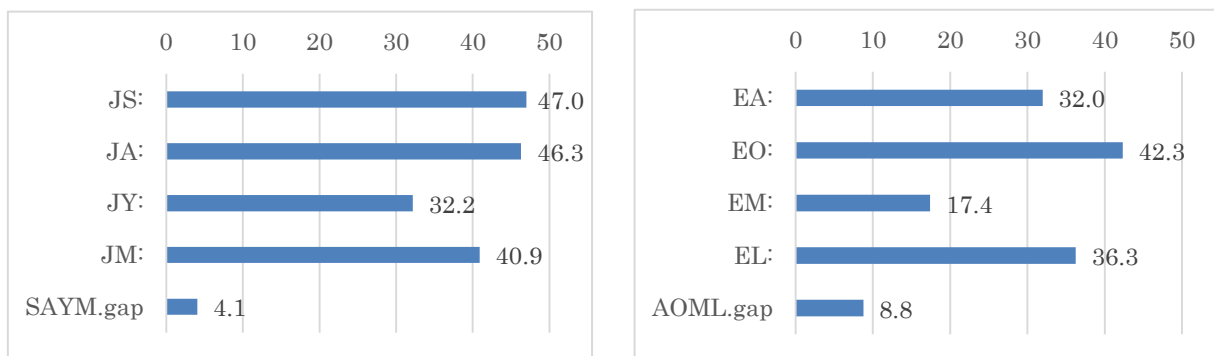


図1 会話時間に対する発話時間の割合(%) (左：日本語会話、右：スペイン語会話)

JS, JA, JM は日本語母語話者、JY はスペイン語母語話者

EA, EO, EM, EL はスペイン語母語話者

SAYM.gap, AOML.gap は沈黙時間 (いずれの参加者も発話していない時間)

EM の発話時間の短さは、会話のテーマに関する知識がなく、結果的にほとんど発言できていないことによるものである。実際に会話の中で、EA により会話に参加していないことを指摘されている。日本語の場合、あいづちを頻繁に打ち、聞き手として積極的に発話することも可能であるが、スペイン語会話ではあまりあいづちが打たれず、話題に関連するトピックを各会話参加者が次々に発言する形で進められていることから、スペイン語のこのようなケースは会話に参加しにくくなる可能性が考えられる。

JY の発話時間の短さはどうであろうか。JY はスペイン人であり、日本語母語話者ではない。

JY の日本語のレベルは極めて高いが、日本には数年居住した程度であり、言語文化面の習得が不十分である可能性が考えられる。また、日本語と JY が母語とするスペイン語との間であいづちの用いられ方や使用頻度が違うことも要因として考えられる。

(2) 発話密度、沈黙、発話の重なり分布

図 2 は、ELAN の統計機能を用いて、発話の分布を出力したものである。上から各参加者の発話密度⁷⁾、沈黙（誰も発話していない時間）、全参加者（4 名）による発話の重なり、二者間の発話の重なり分布を示している。

なお、両会話とも「笑い」が発話として注釈に含まれている。会話が盛り上がり、笑いなどの言語行動が増えれば、上記で抽出した発話密度は高くなることに注意が必要である。「笑い」の頻度としては日本語とスペイン語のどちらの会話でも同程度確認されたが、日本語会話の方が「笑い」の継続時間が長くなっているようである。

全体的に、日本語会話のほうが発話密度、発話の重なり出現頻度共に高くなっていることが確認できる。全参加者による発話の重なり分布 (SAYM_overlap) は、発話権を実際に取得した場合以外にも、全参加者による「笑い」や「あいづち」による発話の重なりなどが含まれている。



図 2 発話密度および発話の重なり分布

JS, JA, JY, JM ... 日本語会話参加者

EA, EO, EM, EL ... スペイン語会話参加者

.gap は沈黙、_overlap は発話の重なりを示す

(3) 発話数に対するあいづちの割合

あいづちについては、「うーん」「あー」「へえ」等の、多くの研究で Backchannels と呼ばれるもの、Clancy et al. (1996) の Reactive Token⁸⁾のうち「そう」「ほんとう」「すごい」等の反応表

現（Reactive Expressions）にあたるものを観察対象とした⁹⁾。

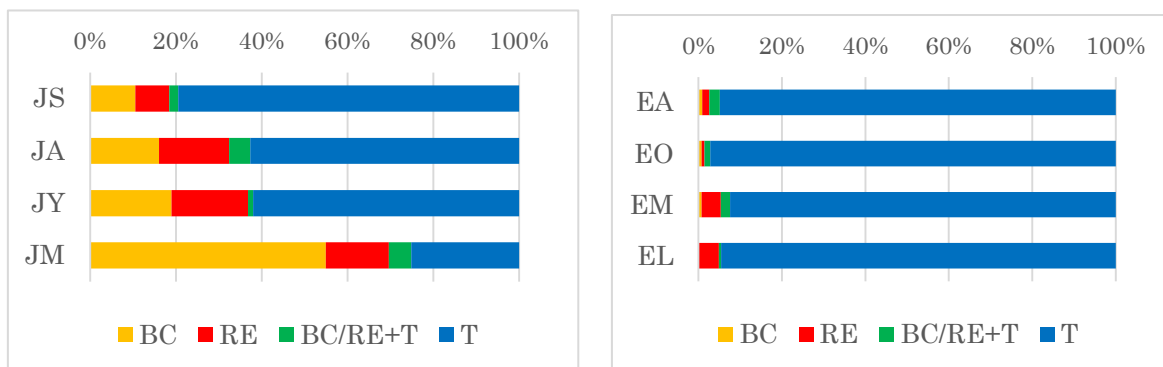


図3 発話数に対するあいづちの割合（左：日本語会話、右：スペイン語会話）

BC ... Backchannels 「うん」、「えー」、「へえ」などのあいづち表現

RE ... Reactive Expressions 「すごい」「そう」「ほんとう」などの短い反応表現

BC/RE+T ... BCまたはREの直後に実質的な発話により話者交替した場合

T ... 発話権を取得する発話

日本語会話ではあいづち的発話が多く、発話権を取得しない（順番交替を伴わない）聞き手としての発話が積極的であることが特徴としてあげられる。一方で、スペイン語会話については発言の多い少ないに関係なく、いずれの参加者も実質的な発話（順番交替を要求する発話）がほとんどであった¹⁰⁾。

日本語会話においてJSのあいづち頻度が少ない理由として、JSにとっては既知の話題が多く、以前の出来事を他の参加者に話すよう誘導している場面も多く見受けられ、結果的にあいづち的な発話が少なくなっていることがあげられる。先取り発話（相手の言おうとしていることを先に発話する）が他の参加者に比べ多く確認され、話題展開をある程度コントロールしている印象を受ける。話題に対する背景知識の多寡が発話権取得を容易にしているようである。

一方で、JMにとっては新情報が多かったことからあいづちが多くなったと考えられる。「聞いている」「賛同している」等といった聞き手としての反応を表出することで、積極的に会話に参加している。

（４）日本語会話の展開

次に、実際の日本語会話の展開を観察する。表1の例では、JSが自宅に空き巣が入ったことを話している。JS, JM, JYは公立語学学校で教師をしている。JAは海外赴任でスペインにやってきてまだ比が浅い（1年弱）。職場にはスーツで行くのか、という話題が展開され、最初に会ったときにスーツを着ていて浮いていたという話から、警察官の生徒が以前授業に制服で来たという話になり、その学生が、先日JSの家に空き巣が入ったときに駆けつけてくれた警官だった、という具合に会話が発展していく。

表1 日本語会話の展開①

| | |
|----------|--|
| 0150 JS: | たぶんね, Vigo でむ 盗んだ人はVigo では売ら[ないだろう[な::]:]と思[うんだけど:] |
| 0151 JM: | [あ:::] |
| 0152 JY: | [それ[はそうですよね::]] |
| 0153 JA: | [そうですね::]] |
| 0154 JM: | [ああ::]] |
| 0155 JA: | [そらそう] |
| | でしょう[ね] |
| 0156 JS: | [う:::]ん |
| 0157 JY: | [難し]いだろね::] |
| 0158 JS: | [でもねバレ]ンティンさんが, |
| | [それこそ生]徒の [一人が, |
| 0159 JY: | [うん] |
| 0160 JA: | [はいはいはい][知ってますよ会った][こと()] |
| 0161 JM: | [うん] |
| 0162 JS: | [あの保険]会社のそう |
| | いう::[なんだ, [お仕事]をして]いたので,= |
| 0163 JY: | [う:::]ん] |
| 0164 JA: | [はいはいはい] |
| 0165 JM: | =うん |
| 0166 JS: | けっこうね, (0.2) |
| 0167 JS: | 普段はだか 例えば普通は パソコンももう新しくないから, |

スペイン語の会話では、誰かがこのような形でストーリー性のあることを話す場合、聞き手は黙って（沈黙を保って）聞いていたが、日本語の場合、聞き手は頻繁にあいづちを打っている。話し手も聞き手のあいづちを想定して、あいづちを期待しているかのように、所々に TRP を設けながら会話を展開する。話し手の発話中の音の引き伸ばしや、コンマ（上昇調のイントネーション）の位置で聞き手によって多くのあいづちが打たれていることが確認できる。また、この例では話を展開している JS 自身が、0156 で「う:::]ん」と聞き手のあいづちに同調するような発話をしている。大浜（2006）は、このようなケースは Sacks et al.(1974)のモデルには当てはまらず、「日本語会話者に特に多く見られ、日本人の言語行動を考える上で無視できないターン交替形式の一つであろうと思われる」と述べている¹¹⁾。発話権に拘らず、話を聞いている、話しているということの確認作業を行っているかのようなあいづちの発話が挿入されていく。

表2では、JYの友人が狭い家に来て泊まったという話から、JMが自分の夫がスペインに来たときのことを話そうとする。JYの話に反応した後、JMはTRPと判断し1054で「でも私も-」と自分の夫の話を展開しようと発話するが、JSがJYの話に対するコメントを発したことから発話を中断し（0.7秒）、1056で再度「夫が:::]一週間-」と発話するが、JSとJAはJYの話題に対する反応を同時に発しており、JMは再度発話を中断する（0.1秒）。その後、JS(1055)とJA(1057)の発話にTRPが確認されたため、すぐに1058で「いや十日ぐらいいたけど」と話を続ける。1059でJSが「あどうしてた:::]?」とJMの発話に反応したことで、JMは話題の切り替えを達成する。ここで注目したいのは、新たな話題を展開する際、発話の重なりを避けている点である。JMは、発話が重なった際に、一旦発話を中断し、TRPと判断できるポイントで発話を再開している。

表2 日本語会話の展開②

| | | |
|----------|---|--|
| 1050 JY: | 山小屋みたいなの | [ね |
| 1051 JM: | | [山]小屋みた あ……] |
| 1052 JY: | | [<risas> |
| 1053 JA: | へえ[:: |] |
| 1054 JM: | [あ:: [でも私も] | |
| 1055 JS: | [ま:: 雑魚]寝:: だね, | [いわゆるね::] |
| 1056 JM: | | [夫が:: 一週間] |
| 1057 JA: | | [まあそりゃそうですね::] |
| 1058 JM: | いや十日ぐらいいたけど:: | |
| 1059 JS: | あどうしてた::? | |
| 1060 JM: | [大変] | |
| 1061 JS: | [ベッド一つ]でしょ [だって] | |
| 1062 JM: | | [そうよ::] |
| 1063 JS: | しか [もあれシング]ルベッド [でしょ::?] | |
| 1064 JM: | [()] | |
| 1065 JM: | | [そうよそうよ::] だかそれじゃ寝れないし:: だから- (.) |
| 1066 JM: | 1人がベッドで1人がソファ | |
| | (0.2) | |
| 1067 JM: | でなんか | |
| 1068 JM: | 交替にローテーション [に | |
| 1069 JY: | | [ああ……:: |
| 1070 JA: | | [あ:: (はいはい)] |
| 1071 JS: | | [ソファってどう?寝]心地は |
| 1072 JM: | ん:: そんなに悪くない [けど(ね)私は] | |
| 1073 JS: | | [あ:: そうな] [んだ] |
| 1074 JM: | | [でも私はちっ]ちやいけど:: |
| | (0.3) | |
| 1075 JM: | 夫のほうがおっきいからたぶ [んあたし:: | |
| 1076 JY: | | [あ:: でも私は]その<es>[colchoneta]</es>を持つてるのに:: |
| 1077 JM: | | [うん] |
| 1078 JS: | [今年の- 今度来たらベッ]ドあるよあたしあ [のほい簡易式]ベッドってか開くやつ | |
| 1079 JM: | [そんないいよそんな!] | |
| 1080 JM: | | [いいよそんな::] |

(5) スペイン語会話の展開

次にスペイン語の会話の展開を確認する。表3の会話に至るまでに、290でEMが「旅行するなら日本のどこに旅行に行きたいか」「日本の何を知りたいか」、という話題を提供する。その後、303でELがあらゆる日本の食べ物を食べてみたいと述べ、312で、「新幹線で食べる」ことに言及する。そこから脱線して電車の話になり、356でEOが京都に言及したことで、「行きたい場所」に話題が戻る。表3はその直後の会話である。

ある話題が提供されたとき、また、話題が切り替わった際に、相手の発話に対するあいづち的発話はほとんど確認されず、各会話参加者は自分のことや自分の持っている情報について挙げて発言し、自分の発話に固執する傾向が複数確認された。表3はその一例である。

表3 スペイン語会話の展開①

| | |
|---------|---|
| 357 EO: | que Kioto es como antiguo todo todo samurai y [todo.] |
| 358 EL: | [a::y sí [::]] |
| 359 EA: | [yo sí- yo sí quisie]ra [co- e- ir a- ir a Osaka, pero] a comer. |
| 360 EM: | [ay yo (por él) quisiera conocer Kioto.] |
| 361 EO: | u::f. (.) |
| 362 EL: | yo::, [no sé::] |
| 363 EA: | [porque ahí se come bu]eno.= |
| 364 EO: | =yo quiero [ir a::] |
| 365 EA: | [y se come del] todo. |
| 366 EO: | yo quiero ir a- a: [::] |
| 367 EM: | [(qué)] [es ["del todo"?]] |
| 368 EA: | [()] |
| 369 EO: | [yo creo que es] |
| 370 EO: | creo que [Yokohama donde- donde es como] un centro grand::te [y venden de todo, |
| 371 EA: | [()] |
| 372 EM: | [<risas> |

表4 スペイン語の会話の展開②

| | |
|----------|---|
| →408 EO: | y::: tofu. (1.0) |
| 409 EL: | el tofu sí sabe rico. (0.3) |
| 410 EL: | yo probé una vez y me supo- no me supo a nada. me supo [(un poco como) plas]tilina [insípida].] |
| 411 EO: | [a mí:::] |
| 412 EO: | [(sea) ()] el tofu no me sé pero yo sé que- yo sé que::: hay muchas recetas con tofu que dicen que son muy ricas. no sé. (0.7) |
| 413 EO: | [pero como amante de la carne en tofu de:::] |
| 414 EL: | [(mejor calentó), o fue algo así.] (1.3) |
| →415 EA: | (yo empecé) a leer. (0.5) |
| 416 EA: | [(pues) no sé yo- yo] [entré-] |
| 417 EO: | [bueno (que- q-)] |
| 418 EM: | [leer?] |
| 419 EA: | sí, yo::: yo entré aquí es como para leer. (0.6) |
| 420 EL: | [(leer?)]= |
| 421 EO: | [no, leer manga, no?]= |
| 422 EM: | =[e-] |
| 423 EA: | =[no, lee]r ma[n]ga, bueno [le]er manga, [y leer literatura] también. |
| 424 EM: | [no, e-] |
| 425 EM: | [lite-] |
| 426 EM: | [leer literatura.] |
| 427 EM: | porque:: (0.2) |
| 428 EA: | por[que es] |
| 429 EM: | [(el optimi]smo) [ante to::do], porque:: |
| 430 EA: | [()] |
| 431 EO: | ah (0.3) |
| →432 EM: | [a cuántos años uno] tend- tiene que estudiar japonés? |
| 433 EO: | [pues yo-] |
| 434 EO: | pues ()= |
| 435 EM: | =no! =pues de pronto- estudiando así y- (ya no sea vivir en) Japó::n (0.1) |

また、相手が何かストーリーを話した後、それに対するリアクションを取らずに、新たなストーリーを提供するケースも散見された。表4はその一例である。矢印の位置で新たな話題が提供されている。提供された新たな話題に対して、それぞれが関連する事柄を発言しようとしている様子が窺える一方で、相手の発話に対する反応よりも発話権の取得の方が優先されている。また、415のような、実際に話されている話題との関連性が低い話題を提示するケースも確認された。

4. まとめと今後の課題

以上、簡単ではあるが、日本語母語話者複数名による日常会話、スペイン語母語話者複数名による日常会話を話者交替の観点から記述・観察した。日本語会話では発話の重なりが非常に多く確認されたが、大部分はあいづちによるものであった。あいづちを用いた、聞き手としての積極的な会話参加が確認された。また、発話権の取得にあたっては、「割り込み」発話を回避する傾向が確認された他、話し手は間や抑揚により TRP を自ら産出し、聞き手の反応を確認しながら会話を展開していた。スペイン語会話では、発話の重なりのは多くは聞き手による「割り込み」発話、もしくは話し手による TCU の延長によるものであり、聞き手の反応に、日本語で多用されるようなあいづちはほとんど確認されなかった。また、話題に対して、情報を提供しようとする（言いたいことを発言しようとする）傾向が確認され、相手の発話に対する聞き手としての反応が確認されないケースも複数確認された。

今回はある程度気心の知れた間柄である母語話者複数名による日常会話の1つの事例を比較したのみであり、観察された特徴を日本語会話とスペイン語会話の特徴として一般化することは決してできない。さらに広範かつ詳細な分析が必要であるが、少なくとも先行研究と概ね同様の傾向が観察されているといえるだろう。

言語教育でも特に中級・上級の学習者にとって、今回のような事例比較およびそのデータの活用が外国語運用能力を高めるために不可欠であることは、多くの研究者が主張するところである。今後は分析データを増やし、また他の条件下での複数人会話を観察・比較することでスペイン語・日本語教育における言語資料としての活用を考えていきたい。

【注】

- 1) スペイン人であり日本語母語話者ではないが、母親が日系ブラジル人であること、公立語学学校の教師をしていること等から日本語のレベルは極めて高い。今回の調査では他の会話者との関係性を重視して観察対象に含めた。
- 2) 日本語会話はスペインの公立語学学校の喫茶店で、スペイン語会話はコロンビアの私立大学の教室内で行った。各参加者には事前に日時を設定して集まってもらい、IC レコーダーを用いて録音した。録音中、筆者は席を外し、会話のテーマなど条件は設けず、自由に雑談してもらった。
- 3) 文字化にあたっては、主に以下の表記方法を用いた。

| | |
|-------|-------------------------------------|
| [] | 音の重なり |
| = | 発話の密着 |
| (.) | 0.2 秒以下の短い間 |
| (0.4) | 0.2 秒よりも長い間音が途絶えている場合は実際の秒数を括弧内に記す。 |

-
- : 音の引き伸ばし。音の伸びの長さに応じてコロンの数を増やす。
 - 音の途切れ
 - (言葉) 不確定な発話
 - () 聞き取り困難な発話。括弧内のスペースの長さは発話の長さに応じて調整。
 - . (ピリオド) 語尾の音調が下がっている場合
 - , (カンマ) 音が少し上がって弾みがついており、続きがあることを予測させる場合
 - ? (疑問符) 語尾の音が上がっている場合
 - h 呼気音。呼気音が長くなるごとにhの数を増やす。笑いを表す際にも使用。
 - 文(h)字(h) 呼気音が言葉に重ねられている場合には、発話の途中に(h)を挿入する。
 - .h 吸気音。吸気音の長さに応じてhの数を調整する。
 - <es>/</es> 会話中に別の言語（この場合はスペイン語）を用いた場合。

4) ELAN はオランダのマックス・プランク心理言語学研究所が開発した、映像や音声ファイルを再生しながら自由に注釈を書き込むことができるアノテーションツール。Version:6.4 (M1 mac版)を使用した。

5) ターンテイキング（話者交替）システムは、Sacks, Schegloff, Jefferson(1974)によって提唱された、発話の順番取りシステムのことである。Sacksらによれば、会話における順番交替は会話の基本的な側面であり暗黙のうちに複雑な規則によって達成される。

6) TCUの完結可能な点、すなわちTRPは、あくまで完結しうる点であり、話し手はTCUを延長することもありうるため、必ずそこで完結するとは限らない。

7) ここで述べる発話密度とは、各参加者が発話を開始してから終了するまでの時間の合計が全会話時間に占める割合のことである。

8) Reactive Token (RT)は、他の話者が話している間に、聞き手の役割を果たす者が発する短い発話で、通常は発話権利を取得しない。

9) どこまでをあいづちとするかについては研究者の間でも見解が分かれるところであるが、Clancy et al.の研究のReactive Tokenのうち、Reactive Expressionについては多くの研究者の間であいづちとして認められている。

10) Clancy et al. (1996)は中国語、日本語、英語におけるReactive Token (RT)について研究し、日本語と英語には多く確認され、中国語にはあまり確認されなかったと報告している。

11) 大浜 (2006) , p.46.

【参考文献】

大浜るい子 (2006) 『日本語会話におけるターン交替と相づちに関する研究』, 溪水社.

木暮律子 (2002) 「話者交替における発話の重なり-母語場面と接触場面の会話について-」『日本語科学』11 (2002年4月) 115-134.

高木智世・細田由利・森田笑著(2016) 『会話分析の基礎』, ひつじ書房.

細馬宏通・菊池浩平編 (2019) 『ELAN 入門 -言語学・行動学からメディア研究まで』, ひつじ書房.

Calsamiglia Blancafort, Helena; Tusón Valles, Amparo. 2007. *Las cosas del decir*. 2ª edición. Barcelona: Ariel.

Clancy, Patricia M.; Thompson, Sandra A.; Suzuki, Ryoko; Tao, Hongyin. 1996. "The conversational use of reactive tokens in English, Japanese, and Mandarin." *Journal Pragmatics*, 26, pp.355-387.

Sacks, Harvey; Schegloff, Emanuel A. and Jefferson, Gail. 1974. "A Simplest Systematics for the

Organization of Turn-Taking for Conversation”. *Language*, 50, No.4, Part 1, p.696-735.

Solano, Patricia Guillén. 2010. “EL MANEJO DE LOS TURNOS DE HABLA: APLICACIONES DEL ANÁLISIS DE LA CONVERSACIÓN EN LA ENSEÑANZA DEL ESPAÑOL COMO SEGUNDA LENGUA” *Filología y Lingüística* 36 (2), pp.163-173.

Tannen, Deborah. 1984, 2005. *Conversational Style*. Oxford: Oxford University Press.

【参考ウェブサイト】

ELAN (Version 6.4) [Computer software]. 2022. Nijmegen: Max Planck Institute for Psycholinguistics, The Language Archive. Retrieved from <https://archive.mpi.nl/ta/elan/> (2023年3月28日アクセス)